

共生社会特別委員会委員会調査報告書

令和7年11月5日（水）から7日（金）まで、京都市障害者スポーツセンター外3か所において、次の事件について調査を実施したところ、その概要は別添のとおりでした。

【調査事件】

- ・ 当事者目線の障がい福祉・障害者雇用について
- ・ デフリンピック・パラスポーツの推進について
- ・ 多文化共生に向けた取組について

令和8年2月20日

神奈川県議会議長 長 田 進 治 様

共生社会特別委員会委員長 ます 晴太郎

1 調査の概要

(1) 調査日程

令和7年11月5日（水）から7日（金）まで

(2) 調査箇所

- ア 京都市障害者スポーツセンター（京都府京都市左京区高野玉岡町5）
- イ 社会福祉法人榊椽会 ソーシャルインクルージョンヴィレッジ
（奈良県生駒郡三郷町立野北3-1 2-5）
- ウ 近畿大学農学部（奈良県奈良市中町3 3 2 7-2 0 4）
- エ 泉佐野泉南医師会看護専門学校（大阪府泉佐野市湊1-1-3 0）

(3) 出席委員（計12名）

ます晴太郎委員長、野内みつえ副委員長、
小林武史、武田翔、田中信次、内田みほこ、土井りゅうすけ、原聡祐、森田学、
望月聖子、岸部都、亀井たかつぐの各委員

(4) 随行者

川瀬主事（議会局議事課）、小花主査（文化スポーツ観光局総務室）、
竹内副主幹（福祉子どもみらい局総務室）、宮下副主幹（教育局総務室）

(5) 行 程

- 11月5日（水） 新横浜駅～京都駅～京都市障害者スポーツセンター～京都市内泊
- 11月6日（木） 京都市内～福祉法人榊椽会 ソーシャルインクルージョン
ヴィレッジ～近畿大学農学部～奈良市内泊
- 11月7日（金） 奈良市内～泉佐野泉南医師会看護専門学校～新大阪駅～新横浜駅

2 京都市障害者スポーツセンター

(1) 調査目的

京都市障害者スポーツセンターは、公益財団法人京都市障害者スポーツ協会が京都市から指定管理者として指定を受けて管理運営しており、障害のある人のスポーツ・レクリエーション活動の推進拠点として、プール、体育室、卓球室等のほか、会議室や和室等も備え、障害のない人との共同利用による交流の場として設置された施設である。

同センターでは、障害のある人のスポーツ振興と健康の増進を図り、社会参加を促すとともに、障害のない人との共生社会の実現に向け、パラスポーツの体験教室や茶道体験といった文化体験のほか、救急法講習会や医師にどのような運動をすればよいか相談できる医事相談を開催する取組や、公益財団法人京都市障害者スポーツ協会がボッチャをベースに開発したオリジナルのパラスポーツ「スクエアボッチャ」の普及活動に取り組んでいる。

本県でも「かながわパラスポーツ」を推進する取組を行っていることから、京都

市障害者スポーツセンターを訪問し、パラスポーツの推進に係る取組を調査することにより、今後の委員会調査の参考に資するものとする。

(2) 調査先出席者

京都市障害者スポーツセンター長、
公益財団法人京都市障害者スポーツ協会担当係長ほか

(3) 京都市障害者スポーツセンター長挨拶

(4) 委員長挨拶



(5) 概要説明

次の内容等について、説明があった。

ア 設置経緯

イ 設置目的・理念

(ア) 健康の維持・増進

(イ) 交流の場の提供

(ロ) 社会性の向上

(エ) スポーツの普及・振興

(オ) 指導者・ボランティアの育成

(カ) 障害理解の促進

ウ 施設概要

エ スクエアボッチャ誕生までの経緯

(6) 施設見学



(7) 見学中の質疑応答

質 疑 トイレの表示板が電気で光るようになっていてはなぜか。

応 答 色覚に障害のある方にも分かりやすくするためである。

質 疑 足に障害のある方は、少しの滑りで転倒する危険があるが、プールでは何か対策をしているのか。

応 答 滑りにくいタイルを敷いている。

質 疑 足に障害のある方がプールを利用する際は人をつけるのか。

応 答 施設側ではつけていない。基本一人で活動していただいている。助けがいるときはもちろん対応する。

質 疑 20分以上続けて泳がないでください、という注意書きがあるが、これはあくまで注意ということか。

応 答 泳いではいけないということではなく、休憩を取るようという注意である。ずっとプールに入ってしまうと体温低下や疲労により危険性が増すため、1時間に5分は必ずプールから上がってもらうようにしている。

質 疑 疲れていることを自覚できない方もいるのか。

応 答 そういう方もいる。

(8) スクエアボッチャ体験



(9) 質疑応答

質 疑 後天性の障害の要因はどのようなものがあるのか。

応 答 後天性の障害の要因は様々あるが、多いのは脳血管疾患で、最近増えたと感じるのは心疾患の方。

質 疑 運動メニューは作業療法士や理学療法士が考えるのか。

応 答 基本的には月1回、理学療法士やドクターが来て指導している。我々インストラクターも勉強をしているので、適切な運動をお勧めしている。運動だけ知っていても障害だけ知っていても駄目なので、日々勉強しながら仕事をしている。

質 疑 この施設の特徴として、障害のない方にも利用してもらっているとのことだが、広報はどのようにしているのか。

応 答 京都市の市民新聞やホームページを使って広報している。SNSは手が回っていないのが現状である。利用者に次はこんなことをやりますよと伝えており、口コミで仲間内に広まることも多い。

(10) 副委員長挨拶



(11) 調査結果

- 京都市障害者スポーツセンターは、昭和63年に全国障害者スポーツ大会のプール会場として整備され、その後、平成3年に体育館等を備えた総合スポーツ施設となったとのことであった。
- 同施設では利用者に対し、スポーツを通じて次の三つの効果を与えることを目的としているとのことであった。
 - ・ 身体的な効果として、リハビリや身体機能の維持があり、最大の目的としている。
 - ・ 精神的な効果として、ストレス軽減や達成感、前向きな思考を持ってもらうことを目的としている。
 - ・ 社会的な効果として、障害のない人も含めた他の利用者との交流による社会参加を目的としている。
- 運動プログラムを組む際は、身体的な効果をベースに、利用者本人がどのような効果を求めているかを考慮しているとのことであった。
- 同施設を利用することで、同じ障害のある人が活動する姿を見て目標が出来たり、様々な人とネットワークが出来たりといった交流の場にもなっているとのことであった。
- 同施設では、障害の有無を問わず参加できるストレッチ教室等も実施しており、障害者の社会参加や、障害理解の促進につながっているとのことであった。
- 同施設の設備は、次のような工夫があるとのことであった。
 - ・ プールは25メートルプール、小プール、円形プールの三つを備えている。
 - ・ 円形プールは重度障害者向けとなっており、水温33度から35度と温かくすることで身体を動かしやすくしているほか、小さいプールにすることで、利用中に排泄してしまっても掃除がしやすいようになっている。
 - ・ プールサイドと水面の高低差をなくすことで、水面に落ちるといった感覚や囲まれている感覚を軽減するほか、塩素が滞留しにくいため呼吸器に障害がある人でも利用しやすくなっている。
 - ・ 障害によって持ちやすい形は様々であることから、異なる形のラダー（はしご）を設置している。
 - ・ 車椅子でそのまま入れるよう、スロープを設置しており、介助者の負担軽減にもつながっている。
 - ・ プールの室温は30度に設定し、床暖房も設置することで、重度障害者が寝転んでも寒くないようにしている。
 - ・ 更衣室には、車椅子の座面と同じ高さのスペースをつくることで、車椅子から移乗しやすいようにしている。
 - ・ 貸切りで着替えができる親子更衣室を用意しており、障害者と介助者の性別が異なる場合でも利用できるようにしている。
 - ・ 車椅子の座面と同じ高さのトイレを設置しており、寝転んだまま使用できるようになっている。
 - ・ 体育館2階吹き抜け部分を緩やかな傾斜のある軟らかい床にすることで、ウ

オーキングコースにしている。

- 京都市障害者スポーツセンターがスクエアボッチャを開発した経緯は次のとおりとのことであった。
 - ・ 平成25年に、京都市障害者スポーツセンターとして何か新しい障害者スポーツを考案することになり、円形ボッチャが候補に挙げられた。
 - ・ 円形ボッチャは、通常のボッチャが一方向から投げるのに対し、円形であれば等距離のまま皆で投げることができるのではという考えの下考案された。
 - ・ 実際に円形で試してみたところ、円形のコートは準備しづらく、六角形を経て、正方形になった。
 - ・ 正方形を生かすために、赤と青の2チームに緑と黄を加えた4チーム制にすることにした。
 - ・ 当初は赤と青のボールしかないためカラーテープを巻いて対応していたが、業者を探し、新しいカラーボールを製作してもらった。
 - ・ 障害や年齢、体力を問わず参加でき、また大人数でも楽しめるスポーツとして、普及啓発に取り組んでいる。

これら京都市障害者スポーツセンターにおける取組は、本県のパラスポーツの推進に係る今後の委員会調査をする上で、参考となった。

3 社会福祉法人檸檬会 ソーシャルインクルージョンヴィレッジ

(1) 調査目的

社会福祉法人檸檬会は「カラフルな^こ○^せ△^い□が^ひ凹凸ある世界で躍動する、ソーシャルインクルージョンの実現」を目指し、保育事業と障害福祉事業を行う社会福祉法人である。

中でも、ソーシャルインクルージョンヴィレッジは、大学跡地の一部を再利活用し、年齢や国籍、人種、障害の有無にかかわらず「ここで働き、学び、遊び、暮らす。すべての人が躍動できる社会」をコンセプトにした福祉の総合施設であり、大学生主体のキャンパスから住民主体のキャンパスへと転換した「次世代型キャンパス」である。施設内には就労継続支援A型・B型事業所、就労移行支援事業所、外国人向けの日本語学校、通信制高校のほか、障害者も共に働く奈良おもちゃ美術館が開設しており、「誰一人取り残さない社会」の実現を目指して地域に根差したコミュニティづくりに取り組んでいる。

そこで、同施設を訪問し、共生社会を目指す取組を調査することにより、今後の委員会調査の参考に資するものとする。

(2) 調査先出席者

社会福祉法人檸檬会奈良本部次長ほか

(3) 社会福祉法人檸檬会奈良本部次長挨拶

(4) 委員長挨拶



(5) 概要説明

次の内容等について説明があった。

ア ソーシャルインクルージョンヴィレッジ設置の経緯

イ 社会福祉法人檸檬会の概要

ウ ソーシャルインクルージョンヴィレッジの取組

(ア) 事業開発における四つのキーワード

(イ) 「学ぶ」

(ウ) 「働く」

(エ) 「遊ぶ」

(オ) 「暮らす」

(6) 奈良おもちゃ美術館見学



(7) 奈良おもちゃ美術館に係る質疑応答

質 疑 スタッフはどのような体制か。

応 答 おもちゃ学芸員として二日間講習を受けた地域ボランティアの方が140名いる。

(8) ソーシャルインクルージョンヴィレッジ全体見学



(9) 質疑応答

質 疑 福祉型カレッジはどのような状況か。卒業生の就職状況などは。

応 答 正式な入学が今年からのため、まだこれから実績を出していく。

(※質疑は視察中に随時行われた。)

(10) 副委員長挨拶



(11) 調査結果

- ソーシャルインクルージョンヴィレッジは次のような経緯で設置されたとのことであった。
 - ・ 奈良学園大学が、キャンパス統合に伴い三郷キャンパスの敷地及び建物を三郷町に無償譲渡した。
 - ・ 三郷町は「生涯活躍のまち」をコンセプトに事業者を募集した。

- ・ 保育事業と障害福祉事業を展開している社会福祉法人檸檬会が、社会の問題を解決するためにまだできる事があると考える中で三郷町の募集を見て、手を挙げた。
 - ・ 事業を行うに当たって、「カラフルな○△□が凹凸ある世界で躍動する、ソーシャルインクルージョンの実現」をビジョンに掲げ、障害の有無や年齢、国籍の違いといった個性が活躍できる場所をつくるために取組を進めている。
- 同施設では、ソーシャルインクルージョンを実現する上で「学ぶ」「働く」「遊ぶ」「暮らす」の四つのキーワードを掲げて事業開発しているとのことであった。
- 「学ぶ」をキーワードにした取組として、同施設内で次のような事業を行っているとのことであった。
- ・ 2年間の自立訓練と2年間の就労移行支援を組み合わせた4年制の福祉型カレッジであるレイモンドカレッジを設置し、障害者が特別支援学校を卒業した後の可能性を広げることに取り組んでいる。
 - ・ 広域制通信制高校である精華学園高等学校レイモンド学園奈良校を設置している。
 - ・ ハウディ日本語学校奈良校を設置し、現在100名の学生が、午前中は日本語を学び、午後は同施設内や地域で働いている。
 - ・ 介護福祉士の専門学校創設に向けて整備を進めており、外国籍の学生も入る予定のため、和室の実習室等も備えている。
- 「働く」をキーワードにした取組として、同施設内で次のような事業を行っているとのことであった。
- ・ 障害者が働きに行きたくなる場所をつくることを基本的な考え方とし、B型事業所をはじめとした、多様な働き先を施設内につくっている。
 - ・ いんくるれすとらんや奈良おもちゃ美術館のほか、誘致した和菓子工場や町営のサテライトオフィス、敷地の清掃、パソコンのキッティング（業務で使える状態へセットアップする作業）といった様々な仕事をつくることで、様々な個性を持つ人が、自身に合った仕事ができるように取り組んでいる。
- 「遊ぶ」をキーワードとして奈良おもちゃ美術館を設置しており、次のような取組を行っているとのことであった。
- ・ 奈良県産の木材を多く使用している。
 - ・ 同館のテーマの一つとして「文化継承」を掲げており、館内に信貴山や大和川、龍田大社といった地域の景色を模したデザインを取り入れている。
 - ・ 木で出来た野菜や果物を収穫できる、ごっこファームでは、大和丸なすや大和いも、柿といった奈良県の特産品や、じゃばら、梅、ぶどうといった関西の名産品を収穫できるようにしている。
 - ・ 大人も一緒になって遊ぶことができるほか、ボランティアから成るおもちゃ学芸員とコミュニケーションを取ることで多世代交流の場となっている。
 - ・ 1日2回、つみき崩しのショーを行っており、作成や片づけを施設内の就労継続支援に通う障害者が担当しており、来館者への接客なども行っている。

- ・ 美術館の1階にはカフェを併設しており、就労継続支援に通う障害者が勤務している。
 - ・ 併設のカフェは、県内でカフェを経営するロクメイコーヒーが監修したコーヒーを販売しており、良いものを適正価格で提供することで、障害者の賃金向上に取り組んでいる。
- 奈良おもちゃ美術館は、多くの人に足を運んでもらう中で、同施設で働いたり学んだりしている障害者の姿を自然と受け入れてもらえる場所にするためのシンボリックな施設として誘致され、現在は月1万人の来館者となっているとのことであった。
- 「暮らす」をキーワードとして次のような取組を行っているとのことであった。
- ・ 令和8年4月に同施設内に認定こども園を開設するため準備を進めている。
 - ・ 同施設がある敷地は自然公園法で住居が建設できないため、周辺にグループホーム建設を検討している。

これら社会福祉法人檸檬会ソーシャルインクルージョンヴィレッジにおける共生社会を目指す取組は、本県の共生社会の実現に係る今後の委員会調査をする上で、参考となった。

4 近畿大学農学部

(1) 調査目的

近畿大学農学部は、食料・環境・生命・健康をキーワードに最先端の研究を行っており、中でもICT技術を活用した「なら近大農法」はICT技術により農業の自動化と省力化を実現し、農業初心者でも栽培を容易にすることで、農業人材の増加などに貢献できるよう努めている。

また同大学では、特定非営利活動法人エムワイピー農場との産学連携による近大ICTメロンの試験栽培や、障害者の農業参入を期待して、キャンパス内で障害者と共に近大ICTイチゴの収穫イベントを行うといった農福連携の取組を行っている。

そこで、同大学を訪問し、ICT技術を活用した農福連携の取組について調査することにより、今後の委員会調査の参考に資するものとする。

(2) 調査先出席者

近畿大学農学部教授、奈良県食農部担い手・農地マネジメント課長、特定非営利活動法人エムワイピー農場理事長ほか

(3) 委員長挨拶



(4) 概要説明

次の内容等について説明があった。

ア なら近大農法の概要

イ なら近大農法の取組

(ア) なら近大農法を用いた農作物の栽培

(イ) なら近大農法を用いた商品開発

(ウ) 産官学連携による取組

(エ) 今後の課題

(5) 施設見学



(6) 質疑応答

質 疑 J Aとの何らかの連携はあるのか。

応 答 みつばち等の購入面での連携はある。

質 疑 I C Tを使うことによる効果は、実感としてどのようなものか。

応 答 じょうろで水やりをすると1時間かかるが、機械であれば1分でできる。

質 疑 出口戦略について、企業への販売委託の収益はどのようになっているのか。

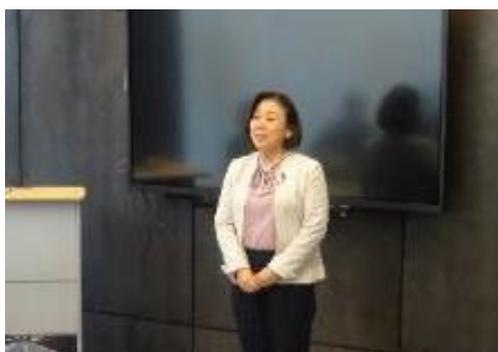
応 答 大学なので利益を求めていないため、収益は企業に行き、契約時に研究費

だけ頂いている。また、なら近大農法のマニュアルは県内企業には無償提供している。



(7) 特定非営利活動法人エムワイピー農場理事長説明
農福連携の現状と課題について説明があった。

(8) 副委員長挨拶



(9) 調査結果

- なら近大農法は、次の二種類の農法を組み合わせることにより、多様な人材が農業に参画することを目指しているとのことであった。
 - ・ 軽量ポリエステル培地を使用することで快適・きれい・健康な新しい農業を実現し、女性や高齢者、障害者も参入しやすいユニバーサル農法。
 - ・ 農作業の自動化を導入し、初心者でも管理しやすいICT農法。
- なら近大農法の経緯は次のとおりとのことであった。
 - ・ 平成 28 年度「県内大学生が創る奈良の未来事業」コンペで近畿大学農学部学生が提案した「農地の窓口」が最優秀賞を受賞。
 - ・ 「農地の窓口」は耕作放棄地の解消や農業による高齢者の雇用創出、企業の農業参入に対するハードル低減を目指し、学生、県、企業が協力して高齢者向け農業サービスを提供するもので、耕作放棄地の再生と新たな担い手による営農のきっかけづくりになるものと評価された。

- ・ その後、近畿大学と奈良県が連携し、生産から販売までの農地活用モデルを実証することで決定した。
- 近畿大学農学部では、次のような取組を行っているとのことであった。
 - ・ ハウス栽培可能なイチゴ、メロン、スイカの栽培に挑戦しており、自律かん水施肥装置により地温、水分量、土壌の塩分や肥料の濃度指標となるEC値を遠隔で管理することで、農作業の負担軽減に取り組んでいる。
 - ・ 農業経験のない学生でも収穫までできるような仕組みを構築することで、農業参入への障壁を低減することを目指している。
 - ・ メロンうどんこ病の薬剤耐性菌の出現や化学農薬の残留、環境問題がある中、化学農薬に依存しない、静電気や光、有用微生物を用いた新しい防除法による安全・安心な農作物の提供を目指している。
 - ・ なら近大農法で栽培している近代ICTメロンを用いた商品開発を行っており、民間企業とのコラボレーションやECサイトでの販売のほか、奈良市のふるさと納税返礼品にもなっている。
 - ・ 栽培管理等の農の入り口と、販売・流通システムという農の出口に最先端技術を導入し、スマート農業の実践を目指している。
- 自律かん水施肥装置は1台で6ハウスの管理が可能で、品種ごとに設定することも可能とのことであった。
- 産官学連携として次のような取組を行っており、SDGsの達成を目指しているとのことであった。
 - ・ 奈良県による就農支援に対し、近畿大学農学部はマニュアル作成や、次のような横展開の支援を行っている。
 - ・ 同大学と企業は共同研究や商品開発を行っている。
 - ・ 同大学と地方自治体や農業法人は農法の導入やインターンシップを行っている。
 - ・ 幼稚園の園児によるイチゴ狩り体験など、農業に触れる機会の創出に取り組んでいる。
- 同大学とエムワイピー農場では次のような農福連携の取組を行っているとのことであった。
 - ・ 障害者の農業体験を実施し、農業への興味を持ってもらい、就農をサポートしている。
 - ・ 規格外のイチゴを加工した農福連携商品の開発を行っている。
- 農福連携における課題として、エムワイピー農場では現在スイカの栽培を行っているが、夏場のビニールハウスは50度近くになるため、利用者からの人気がなく、暑さが大きな課題となっているとのことであった。
- 農業全体の課題として、コストの削減及び労力の負担軽減、減農薬による栽培、AI・IoTの導入があり、同大学では今後も人に役立つ農法の確立を目指して取り組んでいくとのことであった。

これら近畿大学農学部の取組は、本県の農福連携における今後の委員会調査をする上で、参考となった。

5 泉佐野泉南医師会看護専門学校

(1) 調査目的

泉佐野泉南医師会看護専門学校は地域医療への貢献と優しく愛のある看護師の育成を使命とする看護学校である。同学校に在籍する桂真梨菜さんは、車椅子ユーザーの看護学生として、看護師を目指して活動している。日本国内では、看護師となった方がその後車椅子ユーザーとなった事例はあるが、車椅子ユーザーとして看護学校に入学し、看護師になった事例はなく、車椅子ユーザーの新たな道を切り開こうと取り組んでいる。

そこで、同学校を訪問し、桂さん及び学校双方の車椅子ユーザーが看護師を目指す取組及びその支援・環境整備を調査することにより、今後の委員会調査の参考に資するものとする。

(2) 調査先出席者

泉佐野泉南医師会事務局長、泉佐野泉南医師会看護専門学校副学校長、桂真梨菜さんほか

(3) 泉佐野泉南医師会事務局長挨拶

(4) 委員長挨拶



(5) 概要説明

次の内容等について、説明があった。

ア 泉佐野泉南医師会看護専門学校の特徴

(ア) 地域密着型の教育機関

(イ) 国際教育と国際交流

(ウ) 地元創生看護の推進

イ ふるさと納税の導入

ウ 今後の展望

(6) 学校見学



(7) 見学中の質疑応答

質 疑 国家試験において、車椅子ユーザーであることが何か問題になるか。

応 答 何も問題ない。問題があるとすると実習のほうである。

実習先までの道のりが整備されていないときや悪天候の場合に、今のところ補助がないので自費で介護タクシーを呼ぶ等が必要になってしまう。実習先は3市3町内とはいえ、遠い施設もある。

受入先は病院なので設備的にも問題ないが、たどり着くまでが課題である。

(※質疑は視察中に随時行われた。)

(8) 桂真梨菜さんのお話

入学までの経緯や現在の思いについて、お話があった。

(9) 桂さんへの質疑応答

質 疑 なぜそこまで前向きでいられるのか。

応 答 昔は慎重な性格だったが、車椅子ユーザーになったことで、人生に悩んでいる暇はないと思うようになった。何があるかわからないから自分がやりたいことは何でもチャレンジしないともったいないという思いを抱くようになった。

った。それが根底にあると思う。



(10) 副委員長挨拶



(11) 調査結果

- 泉佐野泉南医師会看護専門学校では3市3町（泉佐野市、泉南市、阪南市、田尻町、熊取町及び岬町）をキーワードに地域に貢献することを目指しており、地域密着型、国際教育・国際交流、地元創成看護の三つの特徴があるとのことであった。
- 同学校では次のとおり多様性を受け入れる校風がつけられているとのことであった。
 - ・ 過去にも二分脊椎や難聴、排尿障害といった障害のある学生が入学している。
 - ・ 創設時からアメリカへの研修があり、引率として教員も参加する中で、学生や職員の国際的な視野が養われている。
 - ・ 学生も、障害やLGBTQを含め、個性・多様性として受け入れている。
- 同学校では、車椅子ユーザーの学生が入学するに当たり次のとおり取り組んだとのことであった。
 - ・ 更衣室は狭いため、在宅看護の実習を行うための在宅室を車椅子ユーザーの学生専用の更衣室とした。
 - ・ 当該在宅室に入るためのスロープを用意した。
- 学校法人ではないため障害者を受け入れても人的補助や移動のための車のような国からの補助金は法律上ないとのことであった。

- 桂真梨菜さんが同学校に入学するまでの経緯は次のとおりとのことであった。
 - ・ 第一子の出産を控え管理入院をする中で、助産師を志すようになった。
 - ・ 第一子が無痛分娩で出産した際、脊椎損傷になり車椅子ユーザーとなった。
 - ・ リハビリのために1年2か月の入院の中、身体の動かし方が分からなかったり、トイレに行くのも一苦勞であったりといった患者体験をし、日常生活では気づけないことに気づいた。
 - ・ そうして気づいたことを強みにし、看護師となって患者に還元したいと思った。
 - ・ 退院後、産婦人科クリニックで働く中で、周囲の人にも健常者と変わらず働けると思ってもらえることが分かり、本格的に看護学校を探すことにした。
 - ・ 元々准看護師の資格を持っていたため、准看護師から正看護師を目指すコースのある看護学校を受験したが不合格であり、理由を尋ねると車椅子ユーザーであることが原因と思われるものだった。
 - ・ 准看護師から正看護師になるコースのある学校は少ないため、一から学び直して3年間で正看護師になるコースを含め、大阪府や近畿周辺で学校を探したが、多くの学校に車椅子ユーザーの受入れはできないと言われた。
 - ・ その中、桂さんが看護師を目指していることが新聞記事に掲載されたことがきっかけで国会議員の目に留まり、厚生労働省医政局が大阪府内で受入れ可能な学校を2校探してくれた。
 - ・ その一つが泉佐野泉南医師会看護専門学校であり、同学校の学校説明会に参加した際、車椅子ユーザーだからできないのではなく、できることに目を向けてくれたことで受験を決意し、その後試験を経て入学した。
- 桂真梨菜さんの障害のある看護学生としての所感や要望は次のとおりとのことであった。
 - ・ 車椅子ユーザーとして看護学校に通い、免許を取って看護師になっている人が日本ではまだいない中で、その道を切り開く意義を思いながら学校に通っている。
 - ・ 実習に行った際、患者やその家族から、車椅子ユーザーで看護師をできる人がいるなら負けられない、すごいと思ったといった言葉を聞いて、よかったと思った。
 - ・ なりたい職業があっても障害が理由で目指しにくい方が多いのではないかと思うので、障害があっても自己実現ができる社会にしてほしいと思う。

これら泉佐野泉南医師会看護専門学校及び桂さんの取組は、本県の当事者目線の障がい福祉の推進に係る今後の委員会調査をする上で、参考となった。